

アイアンマンなオリ主
とヒーローアカデミア

どごちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

同じタイトルの作品があつたので名前変えました。

無個性の少年トニオスタークは実家の財力と自身の頭脳を使ってサポートアイテム、アイアンマンを作り上げた！

彼は自身の駆るスーツと共に雄英高校でヒーローを目指す！

その先にある巨悪に打ち勝てるのか！

進めトニオ、どこまでも。

作者の練習作。

トニオスタークは出てきません。オリ主だしご都合主義なのだ。

キャラの性格が違う！とかこの子はこんなこと言わない！みたいなのはオラのオリジナル設定だから許してちよんまげ。

結構飛ばし飛ばし書くと思うのでみんなもヒロアカを、読もう。

タグが間違ってたら修正します。

目次

彼の原点（オリジン）、雄英試験。

1

級友、個性把握テスト、演習。

—

U
S
J

24

10

彼の原点（オリジン）、雄英試験。

世界は不平等だということに気がついたのは僕が3歳のときだった。

僕は今まで親にねだった物を買ってもらえなかった経験はないし、常に家には使用人がいた。僕の家は俗に言うとてもお金持ちだった。

世界は不平等だ。

この世界では人口の約8割が持つとされる個性、僕は――

「残念ながら息子さんは無個性ですな。」

ありとあらゆる高名な個性のエキスパートたちは口を揃えて僕を無個性と判断し、親はそれを医者 of 誤診でないと判断すると僕に優しく語りかけた。

「いい、トニオ。あなたが無個性であつても関係ないわ。あなたはあなたのやりたいことをしなさい。いいわね。」

母は思いつき僕を抱きしめて、

「父さんはいつだつてお前の味方だぞ。無個性だつて関係ないんだ。お金はここで稼ぐんだ。」

父はそう言つて僕の頭を優しく撫でてくれた。

僕はヒーローを目指すことにした。無個性がヒーローになるのは難しいがサポートアイテムを使えばそんなに難しいことではないのでは？と思うようになった。

例えば抹消ヒーローイレイザー。彼はマイナーだが着実な実績を残している。そんな彼の個性は対象を見ることが個性を打ち消すと言う能力。

それ以外は身体能力を増強させるような個性は無い。

それでこれだけ戦えていると言うことは体を鍛えた上で個性の代わりになるサポートアイテムがあれば僕も充分にヒーローとしてやっていけるはずである。

こう言つた説明を拙いながらに両親に伝えると、2人は僕を抱きしめて肯定してくれた。

「お前は賢いと思つていたがここまで先を考えることができるなんてな！流石僕らの自慢の息子だ！」

「あなたがやりたいことを私たちは全力で応援するわ。どんなサポートアイテムが必要か考えているの？」

僕は昔家族と見た見たヒーローの名前を思い出しながら答えた。

「僕はアイアンマンみたいになりたいんだ。」

その日から僕の夢が始まった。

その日から空手を始め、サポートアイテムを作成できるだけの知力をつけるべく勉強に励み、体が大きくなった中学生からは筋力トレーニングも始めた。

幸いに実家が太かったお陰で質の良い学習が出来たしサポートアイテムを作る上で資金はいくらでもあった。僕は恵まれている。

こんなに恵まれている僕はヒーローにならなくてはならない——

懐かしい夢を見たな。今日は英雄高校の受験日だったのに。

日課のトレーニングは今日のために1週間ほど休み、体調は完璧。スーツのオーバーホールや調整は完全に終了している。考えうる限り最高のコンディションだ。

『おはようございます、トニオ様』

「ああ、おはようジャービス。父さんと母さんは？」

『すでにお仕事に、お二人から言伝を預かっております。』

ザザツという雑音の後に聴き慣れた2人の声がある。

『え？もうここに話していいの？…えーオホン。トニオ、あなたなら大丈夫よ。全力を出しなさい。ほらお父さんも』

『ああ、トニオ！ぶつかましてやれ！僕らの愛息子が来たぞ！つてな！』
『以上でございませす。』

「ありがとうジャービス。これは合格するしか無いな。朝ごはんを食べようか。使用人さんをお呼んでくれ。」

『かしこまりました。』

雄英高校受験会場入り口。

使用人さんの運転する車で入り口まで来た俺はトランクから真紅のスーツケース、アイアンマンの待機形態を取り出すとリュックを背負う。

「いつてらっしやいませ、御坊ちやま。微力ながら応援しております。」

使用人さんの応援を背に俺は会場に足を踏み入れた。視界の端ですつ転ぶモジャモジャ頭が見えた。あつ、女の子に助けてもらってる！いいなあ。

午前中の筆記テストは対策を完全にしてきた甲斐もあつて全問正解だろう。アイア

ンマンを作り上げた頭脳に不可能はないのだ。

午後は30名ほどのグループに分かれてバスに乗り、各々が実技試験を受けるらしい。

お昼休憩を挟んで俺たちは早速バスに乗り込んだ。

バスの中はお通夜かというくらいに鎮まりかかっていた。

（無理もない、かくいう俺もそれなりに緊張してるしな。）

バスを降りて俺はすぐに手に持っていたスーツケースを地面に置いて留め具を外すと中に腕を突っ込み腕部装甲に当たる部分に腕を通して引っ張り上げた。

カチャカチャと金属同士が擦れる音とともに装甲が展開されていき、最後に頭部の装甲からスライドしてHUD付きのフルフェイスヘルメットが顔を隠す。

「うわあ、何あれ、カッター!」

「サポータアイテムって持ち込みありだったけ?」

周りの生徒は自身の体に備わった個性1つで試験を迎えようとしている中、派手にサポータアイテムを展開したトニオは悪い意味で注目を集めていた。

『ハイスター!』

プレゼントマイクの声が聞こえるのと同時に俺はすでに展開済みのアーマーから脚部のスラスタをふかして他の生徒を一足跳びに一気に前へと躍り出る。

『ショータイムだ。』

両手を前に掲げるとキュイーン!という独特の甲高い音が響く。

リパルサーレイのチャージ音だ。

ヘルメットの中ではHUD上で目の前の2ポイント敵3体と3ポイント敵1体にロックオンをし、発射。

同時に仮想敵が爆発した。

「弾着よし、練習通りにいけば戦えるな。」

ジャービス、一度高度を上げる。敵ロボットの位置をマップピングしてくれ。」

そういうとアイアンマンは両手を下に向けてと背面のスラスタールと共に一気に加速すると廃ビルを飛び越えてさらに上空へ舞い上がり、鳥瞰的に敵の位置を把握する。

『地形データ更新、仮想敵ロボットの位置をマップピング——完了。』

あとはジャービスの指示に従って仮想敵の多い地点を飛び回りながらすれ違いざまにリパルサーレイや拳をロボットに叩き込めば爆発と共に視界の左下にこの試験開始時からカウントしている獲得ポイント数はどんどんと増えていく。

(こんなに簡単で良いのだろうか。何か俺たち生徒に知らされていない隠しポイントがあつてもおかしくない。かと言ってジャービスはネットワークに接続しない事を条件に今回の試験に持ち込んでいる以上調べることはできない。考えろ、ヒーローを目指

すものを合格させるには……」

考えながらもロボットを破壊するアイアンマンはそこで一人の生徒が怪我をしてい
ることに気がついた。

（そうか、救助もポイントに加算される可能性がある！であれば試す価値はあるはず。
ジャービス！この仮説をもとにボーダーラインを再計算！何点で合格できるか分から
ない以上一度この子を助けて様子を伺うぞ。）

『かしこまりました。トニオ様。』

「その君、怪我をしているだろう。無理をしないで。もう大丈夫だ。痛み止めの湿布
だ。これを貼ってゆっくりとそちらに向かうといい、救護の詰所がある。途中まで一緒
に行こう。」

「でも、君のポイントが……」

「なあに心配はいらない。僕はもう十分ポイントを集めたんだ。」

「すごいや、それ個性？強いんだね。」

「そういう言い方はあまり好きじゃないな。」

「ご、ごめんなさい。」

「いや、いいんだ……ほら着いたぞ。僕は残りの敵を倒すから君も安静にするんだぞ！」

救護詰所に負傷した子を預けた俺はそのまま振り返らずに試験会場に戻ろうとする。

コーン！と思い金属と金属がぶつかり合う音と共にヘルメットのバイザーを下げる
と2、3歩走った後に空中に身を投げ出し空を切り裂く、と同時に

『しゅーりょー!!!』

プレセントマイクの声が試験会場に響き渡る。試験終了だ。

「終わりか、ジャービス、ポイントは？」

『仮想敵ポイントが117、救助のポイントは不明です。』

「上々だ。帰るぞ。今日は疲れた！」

こうして俺の英雄高校受験は終わった。おそらく合格しているだろう。

筆記試験に関しては確実に合格圏に入っている自信があるが実技試験が怪しい。

無個性を理由に不当に不合格にされることはないと思うが敵ロボットの破壊以外にも隠しポイントが設定されていた場合、純粋に足切りに届かない可能性がある。どうなるか分からない。

「くそー、怖いなあ。土傑高校も受験しておくべきだったか……」

帰りの車の中では使用人さんが気を使って黙っていてくれたおかげで俺は今日の結果を振り返ることに集中できた。

家の広大な庭を通り過ぎてこれまた大きい玄関の前に誰かが立っている。

「あらお帰りなさい。結果はどうだったの？」

「母さん。どうだろう。よくわからないんだ。」

「あなたならきつと受かつてるわよ。さ、今晚はトニオの好きなパネトーネをデザートに買つてるからね。食べなさい。」

「やったあ！ありがとう母さん！」

2 週間後。

『——そしてレスキューポイント！君は途中から気が付いたのかな？敵ポイント117、レスキューポイント20の合計137ポイント！堂々の一位だ！来いよトニオスターク！雄英は君を待つてるぜ！』

「ここからだ。ここから俺の物語が始まる。」

「トニオ！何かツッコつけてるの！ご飯冷めちゃうわよ！」

「母さん！今行くよ。」

級友、個性把握テスト、演習。

「……個性把握テスト?!」

「そうだ、お前ら個性を充分に使った経験に乏しいだろう。だからここで一度自分が何ができ、何ができないのか把握してもらおう。そしてそれをもとに成長してもらおうか。」

一見尤もそんなことを言っているが目の前のこの人物は本当に教師なのだろうか。

そもそも合理性を説くわりには廊下でミノムシのように寝袋に包まっていたし。

まさかあの格好のまま職員室から来たとは思えないし、何より入学式をスキップするなんて正気の沙汰とは思えない。

「先生? 一つ質問があります。」

意を決してトニオは仮称先生へと話しかけた。

「先生は本当に先生でしょうか?」

「……どういう意味だ?」

「簡単に言えば胡散臭いです。お手数だとは思いますが他の先生を呼んでいただけますか? できれば隣のクラスとか。」

「……説明を省く意味でその方が合理的か」

「あとその寝袋はどう見ても合理的に見えないです。」

「…今先生を呼んだ。少し待て。」

この後やってきた先生に流石に入学式には出席すべきだと諭され俺たち1—Aも無事入学式に参加できた。

それにしても仮称先生は本当に先生だったなんて、おったまげく!!!

雄英学園、校庭。

「トニオスターク、お前入試一位だったろ、このボール思いっきり投げてみる。」

「はい、かしこまりました。」

先ほどとはうって変わって丁寧になったトニオは仮称先生——相澤というらしいに言われるまま円の中に入り思いっきりボールを投げる。

『ピッピッ！70メートル』

クラスメイトがどよめいた。

「よし、次は個性を使って投げてみる。」

「先生、俺個性無いです。」

「何？ああ、お前はそうだったな。サポートアイテムの使用を許可する。そのアイアンマンは今後お前の個性として学園では扱う。」

「かしこまりました。じゃあ遠慮なく……つと。」

常に持ち運んでいる待機状態のスーツケースを地面に置き、留め具を外して腕を突っ込みアイアンマンを展開した俺はスーツの補助機能を使って全力でボールを投げる。

『ピピッ、1000メートル』

今度こそクラスメイトがざわついた。

「あいつが入試一位ってマジ？」

「てか無個性?!」

「ヤバすぎんだろ!」

「個性使い放題とか流石英雄!」

「面白そ〜。」

みんな好き勝手ワイワイと騒いでいる。

相澤先生の目の色が変わった。

「面白そう、ね。じゃあこうしようか。今回のテスト、成績が一番低かった人は除籍処分

だ。」

相澤先生のトンデモ発言を受け幾らかの生徒が抗議するも虚しく俺たちは真剣にテストを受けることになった。

握力

全力で握ると握力を測定する機械が潰れてしまった。バチバチと火花を散らしている。

『ガガッ……ピピッ！測……定……不能！』

「おおー！触手の個性に続いてあいつも機械ぶっ壊しやがった！」

立ち幅跳び

『ピピッ！飛距離、無限』

『先生！エネルギー尽きるまで飛べますけどどうしますか？』

「降りてこい。」

「（ウチも無限出さな……うえつぶ）」

50メートル走

『ハイスコアを出すには――』

「始め！」

――飛べばいい。』

豪ッ！という音と共に浮かび上がったアイアンマンはそのまま空中を切り裂くように進みゴールラインを通り過ぎる。

『2. 5秒』

「もう少しスタートダッシュを練習すればタイムを縮められそうだな。」

走り（？）終わって振り返っていると一人の男子生徒に話しかけられた。

「君、早いな。僕……俺の名前は飯田天哉。君はトニオスターク君だよな？」

「そうだ。そういう飯田君こそ随分と早いじゃないか。そういう個性か？」

「ああ、僕の個性はエンジン。しかし驚いたな入試一位が無個性だったとは！」

「あまりそういう風に言われるのは好きじゃ無いんだ。悪いけど。」

「ああいや、すまない。侮辱する意図はなかったんだ。」

「なら良いけどさ。結構気にする人もいるんだ。俺は幸いにも実家のおかげでこうしてヒーロー目指せてるけど。」

「そうか…軽々しい発言を謝罪させてくれ!!」

そういうと彼、飯田君は綺麗に90。のお辞儀をした。

「目立ってるから! いいよ、気にしないで! ほら、まだテスト残ってるから頑張ろうぜ
!」

「君は強いだけじゃなくて優しいのか! 素晴らしいな!」

こいつ良いやつなんだろうけど面倒臭すぎる!!!

その後――

「除籍は嘘……! 君たちを騙す合理的虚偽……!」

ざわざわとクラスがにわかに騒がしくなる。

「当たり前ですわ、少し考えればわかりますわよ。」

「そういうことツ……!」

心なしか顎がシャープになった相澤先生は除籍処分は嘘であると言いつ張っているが
それこそ嘘だろう。大多数の生徒は信じている様だが――

やっぱこの先生胡散臭い。

雄英高校、食堂。

午前中、入学式の後に個性把握テストを行った1―A以外の新入生はすでに下校している。

俺たち1―Aは本来入学式の後に行うガイダンスを個性把握テストに充てたため午後にガイダンスを行う事になり、学校に残って他の新入生より1日早く食堂で昼食をとる事になった。

「にしてもトニオのサポートアイテムって本当に自分で作ったのか？ すごいな！ あ、俺切島鋭児郎。 よろしくな！」

「よろしく、俺のサポートアイテム、アイアンマンはいろんな人に手伝ってもらったけど確かに俺が作ったものだよ。」

「へえ〜！ 漢らしいな!!」

食堂のご飯は全てランチラッシュユというヒーローが作っているらしく実家のご飯に

負けない美味しさだった。

ランチラツシユは主に災害時に炊き出しなどで活躍するヒーローらしい。

災害時に派遣されるヒーローと言うのもヒーローの形として考えておくべきかもしれない。

「切島はどんなヒーローを目指してるんだ？」

「俺は漢の中の漢、レッドライオットを目指してるんだ！」

「俺はあんまり詳しくないけど、今調べたらかっこいいじゃないか。」

「だろ!? トニオお前話分かるな！」

俺は切島との会話を楽しみながら今後自分が目指すべきヒーローについて考えるのだった。

——1週間後。

「私が普通にドアを開けて来た！」

「オールマイト！」

「銀時代のコスチュームだ!!」

「1人だけフオントが違う！」

オールマイトの授業は対人戦闘訓練。いきなり2人ペアを作ってヴィランチームとヒーローチームに分かれて戦うらしい。

ヒーローチームはヴィランを行動不能にするか核弾頭にタッチしたらクリア。

ヴィランチームはヒーローを行動不能にするか制限時間の間核弾頭を守り切れればクリア、だ。

俺は推薦入学したという八百万（やおよろずも）さんとヒーローチームとして戦うことになった。敵は同じく推薦入学組の轟君と透明人間の葉隠さん。

轟君の個性は氷を大量に発生させるものだったはず。氷結対策は万全とは言え機械は高温と低温に弱いのが現実。

これは最終的に頭脳プレーが勝敗を分けるな（知将並感）

『よいいスタート！』

オールマイトの声がスピーカー越しに聞こえる。試合開始だ！

「八百万さん、行くよ！プランAだ！」

「なんですの！それ！」

「近づいてぶん殴るだ!!!」

「頭脳プレーは!?」

『じゃあ近づいて頭突きかましてやる!』

「おバカさんですわ!!!」

バカとはなんだ、しつかり頭脳を使っているだろう。

「とにかく私はどうすれば良いんですの?」

『俺がとりあえず角のある部屋に直接壁突き破って突っ込むからゆっくり下から登ってきて!・多分それで上手く行くから!』

『スキヤン結果、核弾頭は4階の角部屋にあるようです。』

『でかしたジャービス、そういうわけで八百万さん、頼んだ!』

そういうとアイアンマンは飛び上がった勢いそのままに文字通り頭を使って壁を突き破り核のある部屋に突入した!

『オラア!ヒーロー様の到着だ!神妙にお縄につけイ!』

「どうやら頭脳プレーは続行しているようだ。遠く離れた八百万のところにまで声が響いている。」

「全く、仕方ありませんわね！」プリプリ！

八百万は頼られると弱かった！

「お前、トニオスタークだな。そんな派手に登場していいのか？」

『頭を使った結果だ！いざ!!』

言うが早いかわらかじめチャージしていたリパルサーレイを轟に向けて発射するトニオ。

「読めてんだよ、そんなくらい！」

しかし轟は厚い氷を目の前に出現させる事でリパルサーレイを受け止めるだけでなく射線を遮る事にも成功する。

『マジ？ どこ行った』

『トニオ様、上です！』

「もう遅え！」

轟は分厚い氷が熱線で溶けた蒸気に紛れて上から奇襲を仕掛けてきた！

『俺のアイアンマンに熱源探知が組み込まれてない訳ないだろ。』

しかし轟がそう攻めてくるのは折り込み済み、トニオはヘルメットの下でいやらしい笑みを浮かべると胸を張り出し、胸部のユニビームを轟に向けて発射した。

熱線が氷を溶かすシューシューという音や天井を焦がしたのか悪臭があたり立ち込める。

体が動かない。

『クソツ、すれ違いざまに一発食らったか。』

轟は氷を発生させながらビームに飛び込み、落下地点にいるアイアンマンの関節部分を凍らせた様だった。

ユニビームを避けられない事を悟った轟はやむを得ずコスチュームで受けのだろう、先ほどまで左半身を覆っていた岩の様なコスチュームが所々剥がれている。

「これでお前は動けねえ、俺も動けねえが後は葉隠がやってくれる……」

「それも読めてましてよー！」

「バアーン！」という効果音が聞こえるくらいドヤ顔で登場した八百万さんがコスチュームから拳銃を作り出して轟君に向ける。

『八百万さん、ずいぶん早いじゃん。あとすごいコスチュームえっちだね。』

「はっ倒しますわよ。あんだけドンパチやってれば嫌でも急ぎますわ！……コホン。とにかく、葉隠さんに気をつけてくださいまし、わたくしはこのまま轟さんを拘束しますわ。」

『そっか……ところでそのコスチュームなんでそんなにえっちなの？』

「個性を使う上でこれが一番最適ですよ！」

『なるほどね……ところで』

「まだ言うか！」

八百万さんの背後、蒸気が不自然に揺らめくのが見えた。

『後ろに葉隠さん来てる——』

「そう言うことはもつと早く言ってくださいまし！」

八百万は叫びながらコスチュームの穴の開いた部分、おへそからうねうねと捕縛網を作り出すとそのまま後方に放り投げた。

『ヒーローチームWIN!!!』

「おおー、めちやくちやな作戦で勝った。ありがとう八百万さん。」

「百でいいですわよ、トニオさん。全く、あなたもつと真面目な人だと思ってましたわ。」
「なんだよ、勝てたんだしちよつとくらいはつちやけたって良いじゃないか。」

試合は終了したのでこれ以上アイアンマンを着る意味もないのでガシヤガシヤと音を立てながら装甲を仕舞い込む。

何はともあれ勝利は勝利。それはそれとしてこの後VTRを観た相澤先生にめっちゃくちやに怒られるのでした。

USJ

オールマイトの対人戦闘訓練から数日が経ったある日の事、昼休み中に学校の避難システムが作動するという事件が起きた。

オールマイトが教師をやっているという情報を嗅ぎつけたマスコミが学校の前で生徒にインタビューをしているうちに一部の過激なマスコミが学校の敷地内に侵入したのが原因らしい。

またその際にパニックに陥った生徒を鎮めたという理由で学級委員長が緑谷君から飯田君に変わった。

マスコミが侵入した事件こそあれどそれ以外は何事も起こらずヒーローとしてではなく学生としての生活を送っていたある日、相澤先生から今日は移動教室であると告げられる。

「せんせー！ またこの前みたいに対人戦闘訓練ですか？」

上鳴君が間延びした声で相澤先生に問いかける。

「いいや違う、今回お前達にやってもらおうのは救助（レスキュー）だ。」

USJと名付けられた雄英高校所有の施設に向かうバスの中では生徒達が雑談に興じていた。

「ねえ、緑谷君、貴方の個性ってオールマイトに似てるわね。」

「ええ！ そうかなあ!？」

蛙吹さんに話しかけられ女子との会話の経験に乏しいからか挙動不審になる緑谷君。今度彼には女の子との話し方をレクチャーしようと考えながら俺は体重を隣の人に預ける。

「よっこいせと。みんなはしやいでるなあ……俺みたいに余裕を持たなきゃ。」

「トニオさん！ あなたちよつとわたくしに寄りかかりすぎですよ！」

「いいじゃないか、減るもんでもない。ケチ臭いぞ。」

「ケチ臭い……このわたくしが……」

「ヤオモモをいじめるな！」

葉隠さんが見えない手でポカポカとトニオを叩く。

「羨ましい〜!!!」

それを見ていた峰田君は血の涙を流す。

「……フツ（嘲笑）」

峰田君は頭に血が昇りすぎて倒れた。

「そろそろ着くぞ、大人しく席に座れ。それか除籍処分がいいか？」

相澤先生がそう言うのと全員が背筋を伸ばし口を閉じる。

バスが止まった。

到着だ。

USJに着いた一行は13号と言う災害救助に特化したプロヒーローから個性という強力な力の使い方について心構えを教えてもらい、いざ実習という所で事件は起きた。

奇妙な光景であった。

黒い点が広場に現れたかと思うとそこから黒いモヤが噴き出し、最初に2人、そして続く様にゾロゾロと人が現れた。

「なんだアありゃ？」

切島がそう呟いたのと相澤が叫んだのはほとんど同時だった。

「全員一箇所に集まって動くな！」

「なんだ？ 入試のときみたいに既に授業は始まってますとかか？」

「あれは——敵（ヴィラン）だ！」

担任の相澤先生から抹消ヒーローイレイザーの顔に変わった事に生徒も気がつき緊張が走る。

それでもパニックになる生徒はおらずヒーローの片鱗が見える。

むしろ敵を倒さんと意気込む生徒もいるくらいだ。

「スターク、通信が遮断された。お前のアイアンマンで学園に連絡は取れるか？」

イレイザーの声色は硬い。

「スーツを着る時間さえあれば……」

トニオもいつもとは違い声に自信がない。

「何秒必要だ？」

「20秒程頂ければ……」

「分かった。13号！生徒を守れ！俺は——」

「敵の目の前で作戦話す奴があるかよ。」

最初に広場に現れた2人組のうち、全身に手をくつつけた男がそういう言うと、もう片方の男がトニオの目の前に現れた。

アイアンマンの装甲はまだ展開しきれておらずアイアンマンに搭載された衛星を介した独自の通信は使用出来ない。

（待機形態では殆どの機能をスリープモードにしていたのが仇になったな……）

トニオは目の前に現れた男の次の一手を逃さぬ様に警戒しながらどうにかスーツを着ようとする。

先ほど広場に現れたのと同様の黒いモヤをトニオに差し向けてきたその瞬間、

『問題ないからこうして話してたんでしようが！』

13号が腕のブラックホールを解放すると黒いモヤが徐々に13号の腕へ吸い込まれていく。

「よかった、これで安心だ……」

峰田が心底安心したと言った表情を見せる。

しかし異形の男は自身が出したモヤが吸い込まれることを気にせず喋り出した。

「貴方の個性はとても強力だが弱点が一つある、それは個性が強すぎるあまり貴方がソレを人に向けた事があまりに少ないということだ。」

この男の個性によるものだろうか、13号のブラックホールが13号の背中から現れて13号自身を吸い込み始めた。

（一体何が起きている?）

事態に気がついた13号が慌ててブラックホールを閉じようとするが間に合わず自身の個性に背中を抉り取られてしまった。

「13号! 大丈夫ですか!」

緑谷の悲痛な叫びや峰田の怯えに当てられて、一部の生徒は完全に敵を恐れてしまっている様に見える。

それを見た全身に手を貼り付けた男はニタアといやらしく笑いモヤの男に指示を出す。

「黒霧! ボスキャラ倒す前に雑魚を片付けろ。」

「かしこまりました、死柄木。」

（2人の名前はシガラキとクロキリだな。）

トニオは貴重な情報を忘れない様に反芻する。

スーツはまだ展開途中だ。

「プロヒーローと言っても所詮はこの程度ですか。次は貴方たちです。」

そう言いながら異形型の男が一步、また一步と峰田達に近づいてくる。

「子供とは言えヒーローの卵。貴方達は——」

Booom!!という派手な音とともに空中に飛び上がった爆豪が異形型の男に殴りかかり切島も腕から先を硬化させながら殴りかかろうとする。

「——こうして散らして捌り殺しにしましょうと伝えるはずだったのですが——」

「(さつきよりもモヤの量が多い!-)」

「——雄英では人の話は最後まで聴きましようと教わらないのですか?」

爆豪が殴りかかったことで異形の男の個性の範囲がブレたのか幾人かの生徒は飛ばされることなくその場に残った。

その中にトニオは居なかった。